

農地とふる里を守り続け、こころ豊かな暮らしを求めて



下町水土里会



活動エリア

事務局長 鎌谷 一也

八頭町



2005年、八東川流域の郡家町・船岡町・八東町が合併し、八頭町となりました。今年には合併20周年を迎えます。

清流に育まれたお米は、昔から定評があり、また梨・柿・りんごなどのフルーツの里でもあります。

旧船岡町地域

旧船岡町の船岡地域では、北村きのご園のエリンギ、大江の郷自然牧場の天美卵などが有名です。

船岡というように、江戸時代から、八東川流域の船着き場の拠点として、米・材木等の流通の拠点であったとともに、山陰随一と言われた牛市場が開かれていた地域でもあり、自然豊かで景観もよく、農業の盛んな地域です。



こおげ花御所柿(GI登録)



二十世紀梨



西条柿



りんご



天美卵



エリンギ

集落の歴史(トピックス)

- 下町集落がある下船岡村は八上郡、八東郡、智頭郡の重要な要で、藩は水陸交通の要衝として重要視。

下船岡神社(下町集落にあり)では、約400年前から“春の御幸祭”が執り行われ、総勢300人で若者の櫛、壮年の御輿が一日中、村中を練り歩き、最後は宮入し、境内で3度練合と称してぶつかる、壮大な祭りが続いている。



春の御幸祭(下船岡神社)

- **牛市**は明治以前から集落で開催され、明治・大正と栄える中で、**船岡市場**は山陰第一の牛市場と言われた。昭和8年には、若桜線開通により市場も移転整備。今でも、**因伯牛**の発祥の地として、記念碑が残る。



記念碑(因伯牛発祥之地)

下町水土里会 多面的機能支払交付金対象地区

令和6年度 3692a (維持・共同・長寿命化)

↑至鳥取

↑至鳥取

千代川

鳥取道
国道53号

八東川

JR因美線

八頭高等学校

国道29号

下町水土里会

若桜線

ライダーの聖地

自然共生サイト

隼駅

大江川

下町水土里会の生い立ち(設立経過)

～集落営農の議論の中で～ 2006年(平成18年)

農事組合法人「船岡下町農場」設立への取り組み

農政の転換を受け、農地を守るため、**集落営農法人**と**農地・水保全管理組合**を設立

2006年12月設立

2007年2月設立

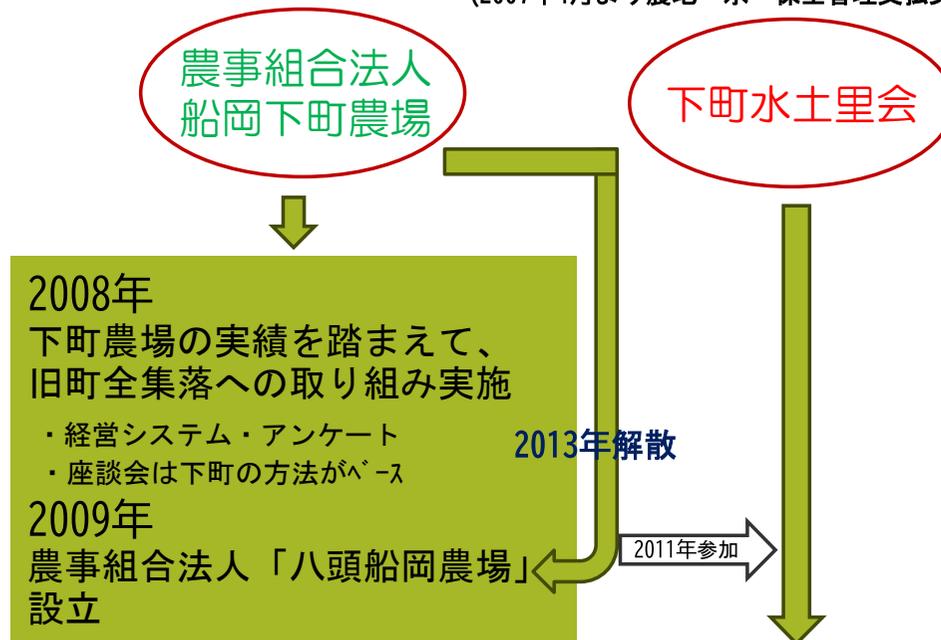
(2007年4月より農地・水・保全管理支払交付事業スタート)

法人設立に向けて、1月～12月に、アンケートの実施、プロジェクト10回、若者・高齢者・女性其々の座談会、2回の実行組合臨時総会を経て設立(06年12月)。

法人を支えるための農地・水保全管理組織「下町水土里会」設立(07年2月)。

理念は、八頭船岡農場へ継承、拡大

集落1農場、耕作放棄地ゼロ、相互扶助、楽しい集落の実現、水田有効活用、野菜振興・自給
・ホビー園芸等による水田高度利用



旧船岡地域(旧船岡町)の農業法人の特徴

- 旧町 全水田面積340ヘクタールに対し、経営面積270ヘクタール、構成員数554名の農事組合法人「八頭船岡農場」が農地・地域営農を担う主体となっている。(2024年時点)

設置 16年前に設立し、34集落に順次拡大 アンケート、集落ごとに集計、座談会の繰り返し、今ほど危機感がない中
資料、パワポ、などで説得。法人の経理システムやルールの構築、そして処理も徹夜が続く。農家プランの利用、現在3次に取組中

農地 旧船岡町の76%の集積 経営面積270ha(直管理約116ha)
中山間地域直接支払対象面積117.5ヘクタール 多面的活動広域協定対象面積136ヘクタール

構成員 合併前の旧町の農家約700名弱の79%が参加 554名

常勤役職員 米部門7名 野菜部門8名 営業・総務3名 畜産2名 計20名

営農分野

水稻部門-食用米 134ヘクタール 直営は30ヘクタール

きぬむすめ、他

飼料稲WCS 13ヘクタール 飼料米SGS他 44ヘクタール

その他 飼料作物 10ヘクタール 計 飼料作物 68ヘクタール

野菜部門-キャベツ3.8ha×2回転 白ネギ4.9ha

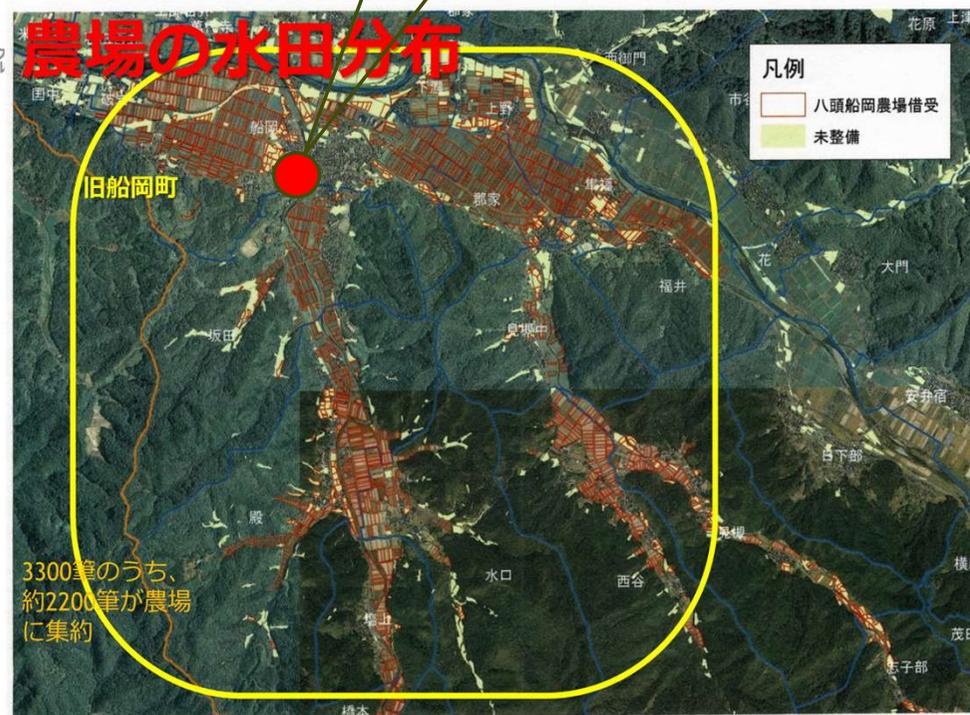
有機大豆、エゴマ、有機白ネギ、イチゴ 等

有機野菜 1.7ヘクタール

林産部門-原木シイタケ 4年目 原木6000本

畜産部門-和牛繁殖 5年目 成牛24頭子牛14頭

下町水土里会



下町水土里(みどり)会 組織と活動の概要

構成団体

- 農事実行組合 畔草管理等農地維持が中心の活動 (5月~8月)
2020年 実行組合の中に**女性部**を設置
- 下町水利組合 用水路・堰等の管理が中心 (5月の井手浚い等)
- 下町自治会 農地・水路の清掃
- 下町自警団 長寿命化事業の自主施工工事 水路草刈
- 下町子供会 生き物調査、体験交流事業
- 下町老人クラブ 農業体験交流支援事業
- その他 女性部を中心とした耕作放棄地防止、大豆等の栽培による福祉施設等との交流事業、毎月1回の統一行動による活動の定型化、月一の「お知らせ」情報紙配布し、活動内容の周知

2007年 当初-実行組合、水利組合、自治会、自警団

2009年 子供会 参加

2011年 農事組合法人「八頭船岡農場」参加

2020年 実行組合に女性部設置
自警団中心に椎茸会設立
長寿命化工事を施工するグループ結成

2024年 老人クラブ 参加

農地維持活動

水利組合による田植前の一斉井手浚い



井出浚い

実行組合は年4回畔草刈による維持管理



急傾斜地の畔草刈作業



ため池法面草刈



山腹水路の泥上げ作業



山腹水路の泥上げ作業



ため池下の水路塞ぐ倒木の伐採



排水路の清掃作業



排水路の泥上げ作業



隣村の耕作放棄地の草刈



線路沿い農道の草刈（車窓の風景維持）



ユンボを使った土砂撤去作業

農地維持活動 ～月一回の**統一行動**～



月一回の**統一行動**で廃屋(作業小屋)を撤去



自治会による農道等の一斉清掃活動

農地維持活動 ～耕作放棄地防止～



実行女性部による大豆の播種



2～3回の草取り



一服の時間、賑やかなひと時



収穫、大学生も脱穀を手伝う

地域農業の担い手の育成・確保

・(農)船岡下町農場から(農)八頭船岡農場へ

下町集落の28.5%集積(94%)
すべての農家が農場の構成員
として参加

※集積圃場の51.3%が農場の直営
集落農地での営農状況

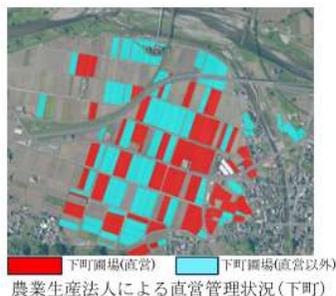
水稲17.5%^タ(無農薬・有機3%^タ含む)

飼料米5%^タ

有機JAS 白ねぎ・大豆1.7%^タ

その他4.3%^タ

裏作として、小麦 7.5%^タ

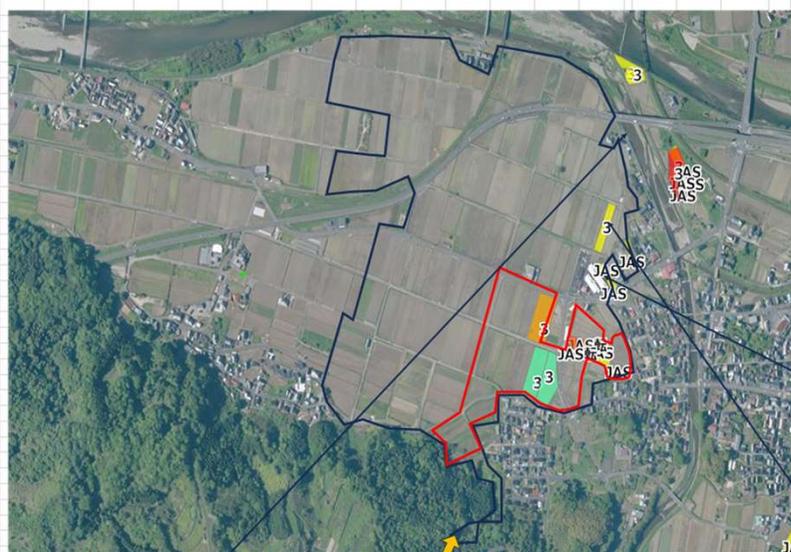


下町農場(直営) 下町農場(直営以外)
農業生産法人による直営管理状況(下町)



(農業生産法人による小麦栽培)

下町水土里会 多面的支払活動エリア及び自然共生サイトエリア等の概要図



下町水土里会活動エリア

自然共生サイト

ため池

JASは認証水田
3は本部JAS申請水田



元来な集落通りで
厚木シイタケ栽培と収穫作業
農場の厚木の切りだし
根木への詰めは、自管田や女性部
収穫は、女性部
精算は農場



女性部
総会と交流

活動概要

- 1 下町実行委員会 農地維持活動 稲刈り等
- 2 水利組合 用水路の元上げ作業、水管理
- 3 下町自管田 水路等の稲刈り 共同活動
農道・水路の補修工事 高齢化
- 4 自治会 金戸一軒クリーニング活動 農道・水路等のごみ収集
- 5 子供会 生き物観察活動、茶会等との平行体験交流
- 6 老人クラブ 今期構成員に加入 水田有効活用と交流、農具支援や手回し稲等
農事通会法人 船岡農場 エリア内の5割を直営管理、稲刈りの支援や共同作業の連携

7 実行委員会の中に女性部を新たに組織して、水田の有効活用を行い、共同での大豆栽培作業、6つまいも栽培作業を実施。
秋には、集落にある種畑施設等の交流を実施している。また、保育園児たちのお米収穫体験の手伝いと交流
①粒豆の収穫体験交流 ②施設の利用者の子供たちとの平行体験交流 ③集落の子供会との平行体験交流
④産地たちの田植え収穫体験交流のサポートと交流
環境保全や元来な集落通りとして、多面活動とは連携関係ないが、厚木シイタケ栽培にも取り組んでおり、
自管田中心に稲刈り作業を行い、収穫・出荷は実行委員会女性部が全場に行っている。

8 また月一回の統一行動を設け、農家・非農家問わず、作業への参加ができる体制をとり、農道・ため池の草刈り
時に排水路の元上げ等を実施している。



施設入居者との交流 秋豆ボジリ



昔は、施設の利用者との平行体験交流
軍持子で参加の子供もいる
今は、集落の子供(子供と親が参加)と女性部
の皆さんたちの平行体験交流

昔は、今年の大田の軍取りの様子。
今は、作業終了後の風景



長寿命化活動

非農家含め若い者が水田に関わるため、自警団を中心に、ほぼ直営施工体制



共同活動(環境保全活動)

・ため池の水抜き



地域おこし協力隊員・大学生の協力による、
ため池の環境保全活動



コウノトリ飛来



生き物調査



ドジョウ



ゲンゴロウ



捕獲したウシガエルの幼生



水抜後に飛来したコウノトリ



用水路を遡上するカメ

環境保全・コウノトリ

- 有機米の取り組みを始めたころから、コウノトリが飛来するようになった！！



環境保全型農業と自然共生サイト

自然共生サイト

環境保全活動

交流活動

営農活動

環境保全型農業

営農は有機JASの

白ねぎ40a、大豆30a

お米63a、他

2年目の転換期間中、

無農薬圃場での

栽培あり

自然共生サイト第4エリア



2024年の作付け状況		圃場番号
有機米	10枚 257 a	①~⑩
有機白ねぎ	4枚 83 a	⑪~⑭
有機大豆	4枚 29 a	⑮~⑲
交流体験有機米	きぬむすめ3枚 20 a	⑳~㉒
	モチ米 3枚 15 a	㉓~㉕
船岡保育園	地元	㉖
小さな花園幼稚園	鳥取市	
いなば幼稚園	鳥取市	㉗
老人クラブ		㉘
消費者ほか		㉙
農業女子チャレンジ水田	2枚	㉚、㉛



①白ねぎ40a (今年JAS取得予定)



②メタン発酵バイオマス発電からの排出消化液の流込み



③有機米栽培ほ場(今年JAS取得予定)



統一行動での急傾斜の草刈



ため池の堤防草刈



コウノトリの飛来



④農業女子 初の米作り (もちろん有機的栽培)



⑤交流体験(保育園、幼稚園)



⑥老人クラブ



⑦水田に飛来したコウノトリ 1羽の零菓上は今年の田植え後、昨年秋水灌としてのため池への飛来 昨年秋、10羽前後の鳥場に飛来



⑧消費者との田植え体験交流 田植え後は神社でBBQ交流



介護・福祉施設との交流

(実行組合女性部活動)

障がい児童施設の子供たちとの芋ほり体験交流時には、
車椅子の子供たちも参加



介護老人福祉施設での
枝豆ほじり体験交流



実行女性部と子供会との交流活動



保護者のオヤジは、外でイモBBQ!
公民館2階では、お母さんと子供たちと高齢の女性部の昼食交流。
まず自己紹介から...

消費者グループ等との 田植・稲刈体験交流

(東日本大震災の年から)

2011年から5年間は、収穫したモチ米
をもって宮城石巻仮設住宅へ。
その後は、交流事業として実施。

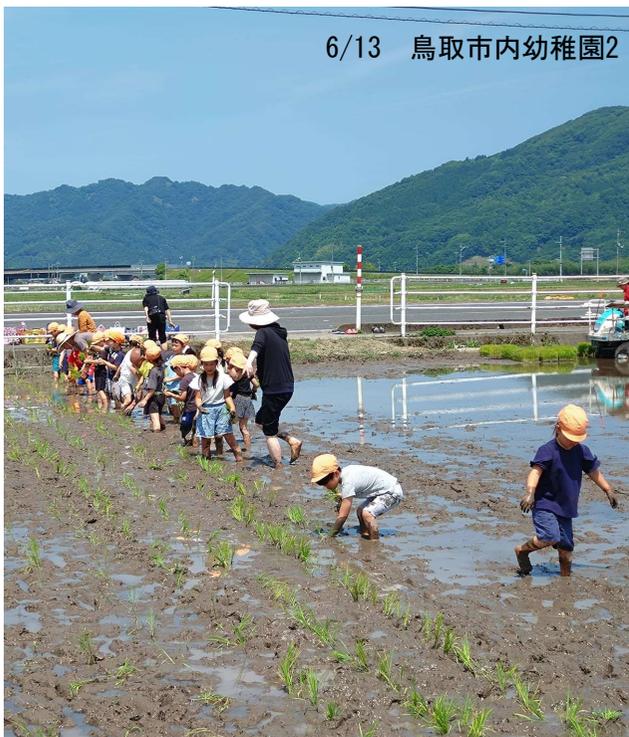


籠もり堂で食後ワンマンショー

保育園、幼稚園との交流事業



6/12 鳥取市幼稚園



6/13 鳥取市内幼稚園2

地元保育園とは14年目、市内2幼稚園とは3年目



6/10
どろんこ遊び



6/14 地元保育園

幼稚園児の泥遊びの様子

代かきをやってくれた?動画



保育園、幼稚園との交流事業②

稲刈には、**実行女性部**が参加。



環境教育 (生物多様性・環境保全)

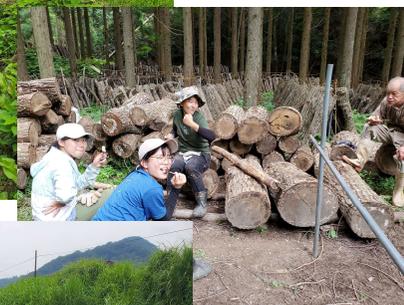


学生との連携、農山村アルバイトほか

エリア内での支援 有機ねぎ等草取り、水田畔草刈



広域(集落協定の無い集落旧船岡町地域)では、環境保全の有力な戦力



下町老人クラブの能登半島震災支援活動



能登半島震災支援 モチ米田植え 年寄りも元気に地域の復興を!!



田植が初めての婆さんも



92歳の婆さんも、鎌で稲刈り

能登半島震災支援活動

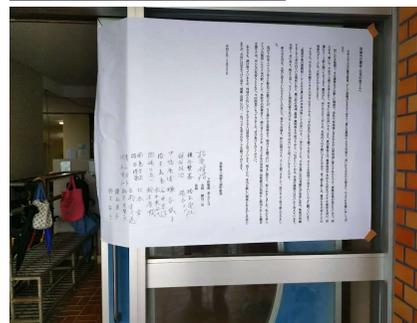
～能登・珠洲市へ～

老人クラブで栽培したお米は餅つきを行い、500個能登へ。
園児や消費者団体等が栽培したモチ米は、玄米60キロ、精米60キロ持参で能登へ。

構成団体でもある八頭船岡農場支援隊が、有機白ねぎ850本、キャベツ150個、豚汁資材をもって能登へ。幼稚園児たちのエールも持参し、約30臼の餅つきを珠洲の婆さん方と一緒に実施。



2月に続き、12月に車3台・9名で訪問



集落内の各組織の連携と農林業との関わり

- **自警団**・・・団員を中心に、長寿命化の自主施工を担う。
また、独自に年2回用水路・河川の草刈を実施
椎茸会も組織して、集落の女性部との連携で椎茸栽培の連携をとる。
- **女性部**・・・協働を通じて人の輪や相互扶助の関係を培う。大豆・芋の栽培と福祉施設との交流。幼稚園等の稲刈り体験の指導、交流。地域の子供たちとの芋堀交流。さらに、原木椎茸の植菌・収穫・出荷を担う。
- **農場**・・・**遊休農地**にハウスを建設、遊休作業場を利用して**乾燥施設**導入。



耕畜連携の取り組み

- 飼料稲、飼料米の圃場、有機栽培の水稲・白ねぎ・大豆の圃場、小麦の圃場へ、10a当り2~4トンの堆肥を入れるとともに、ひよこカンパニーへ供給する飼料米の圃場には同社の鶏糞を入れて連携を取っている。

山積みの堆肥、耕運と散布



小麦畑のドローンによる防除



有機水田・白ねぎほ場への消化液投入・散布



課題と今後の取り組み

地域の営農の担い手については、旧町一本の船岡農場(常勤役職員20名)が担える体制を構築している。しかし、環境保全や景観維持を含め、**集落の活力はやはり集落・地域の営農**にある。非農家含めて、農に関われる体制、米作りができる体制、わが村の水田や景観は集落で守るという取り組みが重要と考えている。

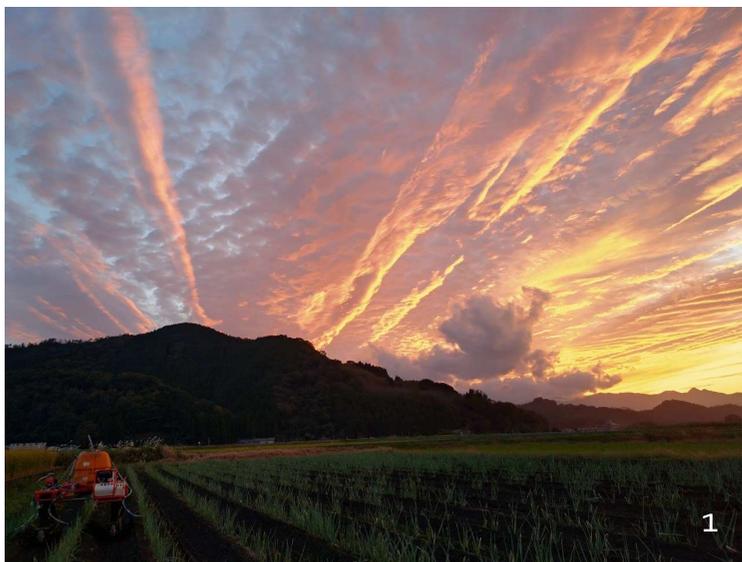
多面的組織についても、現在、集落で出来なくなった場合は、農場が事務局をもつ広域協定に入って継続できる体制も作っているが、これもできるだけ、**集落の主體的な活動を維持**していくうえで、集落協定での取組を重視している。

いつ災害や不慮の出来事があるか分からない時代にあって、従来の集落組織の活動を維持していくとともに、新たに連携し、**協働できる体制**をつくるなかで、**集落民の相互の絆と助け合い・連携を強めていく**ことも大切であり、多面的機能支払交付金を活用した**自警団・女性部・子供会の集落内での連携**を実施してきた。そして、集落外の**学生、幼稚園児・消費者との連携・交流**は活力を維持する上でも重要である。

今後、地域住民をより積極的に田んぼへ引っ張り込むか。関係人口作りとして、環境保全活動や環境教育活動を通じて、自然共生サイトや有機農業の取組を通じて、企業や外部人材、若者との関係をどう強めるか。

誰でも気軽に、農業に従事できる体制と風土をつくるか。そして、その合意形成をどう強めていくかが、課題と考えている。

変わりゆく自然の中で、共に生きる生き物と、働き暮らしていける世界は最高!



- 1 夕暮れの作業と夕焼け
- 2 朝仕事と朝焼け、日の出前
- 3 代かきの横で餌を探すコウノトリ
- 4 朝もやの中に行むコウノトリ
- 5 トンビのひな鳥



ご清聴ありがとうございました